

遺伝子検査をもっと身近に

チーム医療に根ざした院内における遺伝子検査体制の構築のシナリオ

2013年10月12日(土) 12:10~12:50 第II会場 パシフィコ横浜 5F 501

座長

東京慈恵会医科大学 臨床検査医学講座
准教授

松浦 知和 先生

演者

横浜市立大学附属市民総合医療センター 輸血部
部長

野崎 昭人 先生

本学会ランチョンセミナーは整理券制でございます。

※整理券につきましては大会受付近くの整理券配布所で配布いたします。

遺伝子検査をもっと身近に チーム医療に根ざした院内における遺伝子検査体制の構築のシナリオ

横浜市立大学附属市民総合医療センター 輸血部
部長

野崎 昭人 先生

抄 録

【はじめに】

ヒト・ゲノム解析が完了し 10 年以上経過した現在、遺伝子検査の結果をもとに薬剤の薬効や副作用を予測する Pharmacogenomics (PGx) を用いた個の医療という概念は、治療効果を高め、医療費の削減にも繋がること期待されているため実用化が急速に進められている。遺伝子検査は個々の患者の治療法の選択に直結しており、臨床医と検査実施者との緊密な連携が必要な検査項目であるといえる。

本講では、C 型慢性肝炎治療における遺伝子検査を例に挙げ、当院における臨床検査部との連携による遺伝子検査体制の構築に関する取り組みを紹介する。あわせて、困難と思われがちな遺伝子検査であるが、機器による自動化によって簡便に実施可能になっているため、遺伝子検査をもっと身近に感じていただければ幸いである。

【C 型慢性肝炎治療における遺伝子検査】

本邦において C 型肝炎ウイルス (HCV) キャリアは 150 万～200 万人と推定されている。HCV 感染は健康成人であっても約 70% で慢性肝炎へと移行し、炎症の持続により肝硬変や肝細胞癌へと進展する疾患である。

ペグインターフェロン・リバビリン併用療法の登場により C 型慢性肝炎の治療成績は飛躍的に向上した。しかし、重篤な貧血の副作用や日本人に最も多い遺伝子型の HCV に感染した症例の約半数例では HCV を排除できないといった問題がある。近年、治療開始前に効果を予測する指標として IL28B 遺伝子多型 (SNP) が有用である事が報告され、「C 型肝炎治療ガイドライン」においても IL28B SNP 解析による治療効果予測が推奨されている。

2011 年 11 月には、プロテアーゼ阻害剤であるテラプレビルが使用可能となり、ペグインターフェロン・リバビリンにテラプレビルを加えた 3 剤併用療法が広く行われるようになった。これにより、初回治療の著効率は約 70% と向上したが、より高度な貧血の進行など副作用も増加した。近年、ITPA SNP が貧血の副作用の発症に関与していることも報告されている。

【臨床検査部との連携】

以上のように、IL28B・ITPA 遺伝子検査は C 型慢性肝炎治療における薬効・副作用予測のため重要な検査項目であるといえる。そのため、臨床検査部の協力のもと IL28B・ITPA SNP の院内における遺伝子検査体制の構築を目的として、各種 SNP 解析法の比較検討と臨床的有用性の評価を実施したので報告する。

【i-densy の紹介】

このたび検討した機器の 1 つである i-densy IS-5320 (アークレイ) は、他方法とも解析結果が一致しているうえ、全血を試料として前処理・PCR・解析までを全自動で行える機器である。遺伝子検査の院内導入には、簡便な解析方法が望ましいと考える。

出典:2013, 『日本臨床検査自動化学会会誌』 38 (4)